





く、ほとんどが場面における対象物と話者の位置関係や文脈での指示対象と指示詞の関係を見るに留まり、実際のインターアクションで使用された指示詞の研究は非常に少ない。そのため指示詞が対象を指し示す指示的機能(referential function)に注目が集まる一方、インターアクションの中での機能はあまり研究されていない。さらにコ・ソ・アの三系列の使用や意味の違いに議論が集中し、日本語の指示詞には「これ・それ・あれ」「この・その・あの」以外にも多くのバリエーションがあることは見過ごされている。

例えば日本語では人を指し示すときに「あれ誰?」「あいつ誰?」「あの人誰?」「あちらどなた?」などさまざまな指示表現を使って言い表すことができる。この違いはこれまでの指示詞研究で議論されてきたような、対象人物が話者の近くにいるか遠くにいるか、話者の範囲(なわ張り)内にいるか外にいるかということでは説明できない。話者と聞き手の対人関係、場面の改まり度、そして指している人が年上か年下かなどさまざまなコンテキスト要素が指示表現の選択に関わってくる。指している人に対する話者の態度(「あいつ誰?」では否定的な感情が伝わる)も関係するだろう。

日本語の指示詞の中でも特に私は「こんな・そんな・あんな」という指示詞に興味がある。「この本読んでるの?」と「こんな本読んでるの?」では同じ本を指していても伝わり方は異なり、後者では話者の驚きや本に対する否定的な感情が表されている。中島みゆきの「そんな時代もあったねと、いつか話せる日が来るわ」という歌詞はどのような時代なのかが明示されていなくとも辛かった時代という含意が伝わってくる。これは「こんな・そんな・あんな」という指示詞自体に感情的な意味が含まれているからであり、指示詞でありながら同時に感情表現のデバイスとしての役割を果たしている。

またこれまでの研究では指示詞の使用を解釈するための基となる「コンテキスト」が固定的な概念として扱われてきたが、インターアクションの中で指示詞を観察していくとコンテキストは柔軟で瞬間毎に変化するものと捉える必要があることが分かる。「あの人ほんと嫌い! なんとかしてよこの人って感じ!」という発話では同じ人物について文句を言っているが、はじめは「あの人」で対象人物を突き放すような視点から、その直後に「この人」とあたかも目の前に嫌いな人がいるような視点から感情を表している。このように短い発話の中での二つの異なる表現は、話者の視点を含む「コンテキスト」がインターアクションの中で常に変化し続けるものと解釈して初めて可能になる。

今後は以上のような日本語指示詞の特徴を別の言語要素の特徴と比較したり、他言語の指示詞との対照研究を深めていきたい。これまで日本語の敬語表現や人称・呼称についてはさまざまなコンテキスト要素を考慮して選択されること、そしてディスコースの中で使用がシフトすることが指摘されているが、指示詞にも同様の特徴が見られるのは興味深い。指示詞を他の言語要素と関連付けて考察することで日本語の特徴を浮かび上がらせることが出来るのではないかと考える。さらに指示詞は世界の全ての言語に存在するそうだが、日本語で顕著に見られる指示詞の感情表出などの機能を示していくことによって他言語の指示詞でも新たな機能を見つける手がかりになることを期待する。世界のどのような言語に「こんな・そんな・あんな」のような感情表出を伴う指示詞が存在するのか、他言語ではどのような指示詞の使用

が感情表出の役割を果たすのかなど興味は尽きない。指示詞という先行研究が数多く存在する言語要素であっても新たな議論を展開することができることが、インターアクションの中で言語を観察する面白さだと思う。

■□ [03] 第 22 回大会のお知らせ ■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

社会言語科学会の第 22 回大会は、以下の予定で行われます。皆様のご参加をお待ちしています。

【日時】 2008年9月13日(土)・14日(日)

【場所】 愛知大学 豊橋キャンパス (<http://www.aichi-u.ac.jp/profile/05.html>)

〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町 1-1

TEL:(0532)47-4111(総務課)

【交通】 名古屋から豊橋まで JR または名鉄で 50 分(東京からひかりで 1 時間 24 分, 新大阪からのぞみとこだま乗り継ぎで約 1 時間 30 分)

新豊橋駅から渥美線で 6 分(愛知大学前下車)

○ 招待講演

9 月 14 日(日) 12:30-14:00

- ・ 言語政策研究の重要性についてー日本語教育の観点からー

水谷 修(名古屋外国語大学学長, 前日本言語政策学会会長, 元日本語教育学会会長)

○ ワークショップ

9 月 13 日(土) 16:15-18:30 (2 並列開催)

- ・ コミュニケーションに伴う身体動作の時間的構造

高梨 克也(京都大学) 企画者

古山 宣洋(国立情報学研究所)

関根 和生(白百合女子大学)

荒川 歩(名古屋大学)

細馬 宏通(滋賀県立大学)

城 綾実(滋賀県立大学)

榎本 美香(東京工科大学)

- ・ フィールド言語学から日本の社会言語学研究を考えよう

野瀬 昌彦(麗澤大学) 企画者

荒井 幸康(北海道大学スラブ研)

西田 文信(麗澤大学)



論文の URL:<http://www012.upp.so-net.ne.jp/nick1129/doctoraldissertation.htm>

<概要>

本論文は、日本語文末イントネーションの類型を何種類と認めるべきかということ、知覚実験、音響分析調査、文末上昇の機能の判断を求める調査の3点から検証したものである。また、上昇が疑問ととらえられないヨ文のイントネーションがどんな場合に上昇するか/しないかを談話中の発話意図から分類し、教育への応用方法についても議論した。

(2)

題目:Expressivity of Demonstratives: A Contrastive Study in Japanese and English Discourse

氏名:成岡恵子

連絡先:knaruoka(at)gmail.com

学位名:博士(文学) 日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻より取得

取得年月:2008年3月

<概要>

This study investigates the uses and functions of Japanese and English demonstratives in naturally occurring discourse, focusing on the expressive function of demonstratives; that is, the function of expressing the speaker's emotion or attitude. Based on the analysis, this study suggests that the nature of context when examining demonstratives is not static, but dynamic, changing from moment to moment in interaction.

\* \* \* \* \*

博士号を取得された方は、題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150字程度; 英語の場合は 50 語程度)を事業委員会(jassjig2(at)gmail.com(\*))までご連絡ください。ニュースレターにてご紹介させていただきます。

\*(at)の部分はアドレスの自動収集を避けるために通常の記号に代えて用いています。



2008年9月1日

社会言語科学会 事業委員会発行